



# 女性消防団員による 防火防災のPR劇



三重県津市消防団 デージー分団  
分団長 櫻川 政子

## 1 はじめに

津市は、日本一短い市名で知られ、三重県の中央部に位置し、東は伊勢湾を望み、広大な市域の中で豊かな自然環境と県庁所在地としての都市機能が集積された地域です。平成18年に10市町村が合併し、人口約28万人の新しい津市となりました。

津市消防団は、旧市町村の消防団が平成22年に1団化し、定数2,287名、現在は、1本部、10方面団、73分団、2,172名で組織され、うち、女性は学生機能別団員を含めて145名、県下では団員数が一番多い消防団となっています。

## 2 女性団員による寸劇のはじまり

平成22年に開催された津市消防音楽隊記念演奏会において、「火災無子とOL子の防火寸劇・煙が目にしみる」と題して、住宅用火災警報器を題材に初めて寸劇を披露しました。このとき、寸劇を観た県警音楽隊の隊員から、翌年の「三重県警察音楽隊定期演奏会」への出演依頼があり、これ以降継続して公演しています。

## 3 工夫したこと

主に火災予防を題材にしていましたが、岩手県陸前高田市へボランティアに行った際、被災者の方から「地震が発生したらとにかく津波から逃げなくてはならないことを伝えてほしい」との強い思いを伺い、地震を題材とした、『自分の命は自分で守る!』を伝えるために、自分たちの手でシナリオを一から作りました。

まず、様々な人物が各シーンに登場して、《火災無子》がその各シーンについて、「今のシーンについてどう思いますか？」と会場に問いかける、という筋書きです。

主な登場人物は、「非常持ち出し袋のチェックは誕生日に!」と訴える《備江照造(そなえ てるぞう)》さん、津波が来るから「早く逃げろ」と言っても、全然信じない《本間カイナ(ほんま かいな)》さん、たくさんの物を持って逃げようとする《阿須和わが美(あすは わがみ)》ちゃん、地震が来たら、海に近い自宅には戻らず、家族との話し合いで決めた避難場所に逃げる、という正しい判断が出来る《藩壇よし子・まる子(はんだん よしこ・まるこ)》姉妹など、誰が見ても分かり易い役柄です。また、シーンが変わる時には《黒子》が緊急地震速報に慌てる、地震を伝える《アナウンサー》が大道具をくり抜いたテレビの中から登場するなど、子どもにも楽しく観ていただけることを重視しました。

災害を題材とした寸劇の為、楽しければ良いわけではなく、ふざけた内容にならないようにも気を付け、試行錯誤を繰り返しました。

平成24年の『第18回全国女性消防団員活性化秋田大会』に寸劇での出場が決定した時は、被災地であるので、「本当にこれをやっているのか？」と不安になりました。分かり易く、楽しくとはいえ不安のままの披露となりました。

披露の後「コミカルにやっていただいてありがとう、気持ちが明るくなりました」と被災地の方からお誉めの言葉をいただき、



消防団を中核とした地域防災力充実強化大会における寸劇の披露（平成26年8月29日、東京国際フォーラム）



本当に嬉しかったことを覚えています。

このあと、『消防団を中核とした地域防災力充実強化大会』、『平成26年度優良少年消防クラブ・指導者表彰（フレンドシップ）』などの全国規模での公演や、県警演奏会に賛助出演するなど、数々の実績を重ねています。

#### 4 苦勞したこと

寸劇のメンバーは、各方面団から選抜して構成した為、練習場所へ片道1時間以上を要する団員や、また、仕事などによって全員が揃う練習が思うように進めることができませんでした。

しかし、内容の濃い寸劇を完成させたいという、メンバー全員の思いから、自宅に台本を持ち帰っての練習や、たくさんの方の意見を参考に、誰でも分かり易く楽しんでいただけるよう練習を繰り返しました。

次の練習までには指摘された修正点を完璧に改善しようと、自宅でも毎日練習をする生活をしていると、自分たちが消防団員なのか、劇団員なのかわからなくなる時もありました。

ときには、メンバーの気持ちを上げるために「寸劇は、誰が主役でもない、みんなが主役と私は思っている、一つでも役が欠けたらこの寸劇は成り立たない。」との思い

を伝え、士気を高めました。

#### 5 良かったこと

1団化した津市消防団は、以前と変わらず各市町の地域での活動となっており、各方面団が合同で何かをする、ということはほとんどありませんでしたが、この寸劇を通して、一つになっていくことを肌で感じることができました。

合併による弊害であった各方面団の垣根を取り払い一つの目標に向けて何かをやること、それが助け合いの気持ちにも繋がるのがわかり、本当にやってよかったと思います。

#### 6 おわりに

《櫻川政子》よりも《火災無子》が有名になり、「無子さん」と呼んでいただくこともしばしばあります。今後は地元の保育園や幼稚園、老人会でもこの寸劇を披露し、日頃からの防火防災への心構えを伝えていきたいと考えています。

そのためにも、これまで以上に地域とのつながりを大切にし、「消防団をやりたい！」と思っただけの方が増えるよう、魅力ある消防団作りに心掛けていきます。